

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第11回:落語と創作

最初に言うとかけど、今回はまじめである。

笑うとこなんか全然ない。
全くない。
かけらもない。

ゼロである。

だから、覚悟して最後まで読むように。

まじめにいくからね。

ほんとだからね。

さて。

このエッセイ(というか駄文というか垂れ流しというか無意味なたわごと)は、連載開始以来ずっと「上方古典落語」にこだわってきた。「上方古典落語」どころか落語のことなんかどこかに書いてあったんだというご意見もあるかもしれないが、まあ私としてはそう思って書いてきたのである。しかーし! 今回、はじめて「創作落語」に関して書いてみることにした。なぜそのようなことを

思い立ったのか。それにはここに一条の物語がある。それを縷々語っていくことも可能なのだが、読者諸氏には興味のないことであろうから省略する。とにかく今回のテーマは創作落語なのだ。

古典落語というと、江戸時代を舞台にしたものが多いように思われがちだが、現在の上落語で「古典」といわれているもののなかにも、最近にできたものもある。たとえば「どうらんの幸助」という落語には「京都と大阪の間にもう汽車が通じておりましたが、古風で旧弊なおやっさんでっさかい(中略)夜船に乗りまして翌朝、伏見へポイと上がります」(続米朝上方落語選・立風書房)という箇所がある。つまりこの落語は、明治の一時期、すでに京都大阪間の汽車が開通しており、なおかつ三十石が淀川を上下していた時に作られた「新作」なのである。また、

「阿弥陀池」という落語には「わたしの夫、山本大尉は、すぎし日露の戦いにこの乳の下を、一発のもとにうちぬかれて、名誉の戦死を遂げられた」(桂米朝上方落語大全集第十六集)という箇所があり、これは日露戦争のあとに作られたということがわかる。「いらち俵」や「稲荷俵」というネタは人力車が出てくるので明治以降の話だとわかる。これらはすでに古典の仲間入りをしているといえよう。

また、新作落語というと、現代を舞台にして、サラリーマン、やくざ、女子高生、OLなどが登場する作品を思い浮かべるかもしれないが、中には疑似古典というか古典的な上方落語の設定・雰囲気を使って、内容は新しい視点で……というものもある。米朝師匠の有名な「一文笛」や三田純一氏作の「まめだ」などは出来映えも雰囲気もすばらしく、江戸

時代にできた古典と同じく、古き良き時代にトリップさせてくれるし、また、小佐田定雄氏作の「かえり俵」は前述の「いらち俵」や「稲荷俵」の世界を、「雨乞い源兵衛」はマンガ日本昔ばなしの世界を舞台として、その雰囲気壊すことなく、新しい笑いを盛り込んでいる。

現在、新作落語、創作落語に力を入れている噺家は多い。正直なところ、これは私の笑いに対する好みの問題によるのだと思うが、一部の新作落語は、聞いていてどうも「これ、コントとか漫談とどないちゃうねん」と思ってしまい、複雑な思いをする時もあるのだが、笑福亭福笑さん、桂雀三郎さん、桂あやめさん、笑福亭仁智さん、桂小春さん(このたび小春団治を襲名)、桂福車さん(先日聞いた「寺うどん」という新作はむちゃくちゃおもろかった)などの創作落語は、私の笑いのツボを的確に

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第11回:落語と創作

刺激してくれるだけでなく、ちゃんと語り芸としての「落語」になっていて、たいへんうれしい。とくに福笑さんの新作は、そのブラックさ、むちゃくちゃさ、シュールさ、過剰で過激でサービス精神旺盛なところなど、まさに私の好みにぴったりである。皆さん、福笑さんの落語会があったら聞き逃してはいけません(もちろん、ここにあげた以外でも私の好みにあうような新作を手がけている人は数多いだろうが、単に私が不勉強で知らないだけなのである)。

なぜ、古典という結構な先人の遺産が無数にあるというのに、彼らはあえて創作落語という困難な道を選択するのだろうか。落語というものは、江戸の昔からやたらと作られては消えていっているわけで、現在「古典」として残っているものは、それら膨大な量の作品の中で、忘れ去られることなく、風雪に耐え、磨き

ぬかれてきた「傑作」ばかり(のはず)である。つまり、演れば誰が演ってもある程度は受けることは確実(のはず)である。それを捨てて、なぜ創作落語にこだわるのか。まあ、いろいろな理由があるのだろうが、大きな理由の一つは、おそらく「古典落語の笑いと現代の笑いのギャップを何とか埋めたい」ということではないだろうか。創作落語を手がける噺家たちはこう考えているのではないか(たしかめたわけではないので想像である。調べんかい)。

漫才やバラエティのコントに慣れた客は、「めくったら鬼が出たで」「桐か坊主、食うとけ」とか「ここは千日の火屋じゃ」「冷やでええからもう一杯」とかいったのんびりしたギャグには笑ってくれないだろうし、残業と休日出勤の嵐で休むまもない人たちに「さっきも友達仲間が集まって退屈しのぎにわあわあと四方

山の話をしてましてんけど」といったのんびりした状況を想定することも難しだろう。「みかんが一つ、千両!」とか「お伊勢参りの帰りに三十石で云々」とか「寝ていたキツネの頭にぼーん」といった江戸時代を舞台とすることも、観客とのギャップを助長する。漫才やコントは、次々と新しい話題を取り入れているのだ。だいいちいつまでも江戸時代を舞台としていると、落語が能や狂言のような古典芸能になってしまい、漫才やコントに伍して劇場で一般の客を相手に爆笑をよべないものになってしまう。つまり、他ジャンルと喧嘩ができない、政府に保護してもらわないと生き残れない、ひ弱な「芸術」になってしまう。落語は笑芸だし、実際には漫才やコント目当てで劇場に来た客をもその世界に引きずり込み、じゅうぶん笑わせる力を持っているが、笑芸は、時代ととも

に常に変化していかななくてはならない。それには新作をどんどん作らねば……。もちろん、彼らも、創作落語の全てが古典と肩を並べる傑作であるとは思っていないだろう。しかし、中には後世に残るものもあるだろうし、そうでないものにも「時代を取り入れた新鮮な魅力」がある。古典のように練り上げられていないかもしれないが、その分、勢いがある。とにかく怖れずにどんどん作品を作り、少しでも高座にかけることが大切だ……。

たぶん、このようなことを考えて、創作落語というものは作られているのではないかと思う。それはたしかにそのとおりである。どんどん新作を作り、演じてほしいものである。ただ、たとえば江戸時代を舞台にした古典作品には新作にはない「リラックス効果」がある。のんびりとした古き良き時代の話に身をまかせ

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文 第11回:落語と創作

ていると、公害だのダイオキシンだの薬害だの汚職だの戦争だの核兵器だのリストラだの倒産だのサリンだの洗脳だの……といったくそうとうしい現代社会のストレスが洗い流され、リフレッシュできる、という「癒し」の作用がある。これもまた大事な、落語の効能の一つである。単に「笑って、うさをはらす」というだけなら、他の笑芸と同じなのだが、最近の漫才やコントの鋭角的な笑いでは得られないこれらの効果は、落語の非常に独自の価値ではないか(いとし・こいしの漫才や花紀京らがいた頃の吉本新喜劇にはそれに似たものが感じられたが)。とにかく、「時代とともに変化する新しい鋭角的な笑い」と「心をリラックスさせる笑い」は、なかなか両立しないものなのであるが、どちらに偏っても落語の笑芸としての発展・継続はないだろう。落語というジャンルの中に

はどっちもあってほしいわけである。ただ、最近は、古典を演じながらも、その中に現代的な感覚の笑いを盛り込むことができる若手噺家も増えてきているし、新作でありながら聴衆をなごませる作品も出てきているように思う。ええことである。

さて、新作落語を作っているのは、噺家だけではない。落語というすばらしくも魅力的な形式に対して、心ひかれぬ小説家は少なからう(かくいう私も、以前、NHKの落語コンテストに応募し、落選通知の印刷された葉書をちょうだいした。たしか、忠臣蔵狂いの一家があつて……というような話で(まあ「蛸芝居」みたいな感じでしょうか)。最後に、大石内蔵助が使っていた急須を誤って割ってしまい、ものが急須だけに「万事休す」や、という信じられないほどくだらない地口オチで落としたような記憶がある。落選したのも納

得がいく。皆さんは落語を書くとき、決してこういうオチは使ってはいけませんよ。本当は、私の書いたこの新作についてここで縷々語っていくことも可能なのだが、読者諸氏には興味のないことであろうから省略する)。たとえば(ここからずーっと敬称略)田辺聖子、野坂昭如、井上ひさしといった文壇の大御所も落語を書いている(ような気がする。たしかめたわけではないので信用しないように。調べんかい)し、最近では中島らもが落語集を何冊も出している。落語家の伝記的な小説を別とすると、たとえば我孫子武丸は「小説たけまる」(集英社)の中で、落語をモチーフとした連作ミステリを書いているし(と書くこと自体がネタバレではないか、と思い、ご本人に確認してみたのだが、「ネタバレ……といえればネタバレやけど、べつにええけど……」)とのことだったので書い

てしまった。ネタバレが嫌な人は、今読んだことを忘れること)北村薫の人気シリーズ(何というシリーズなのか名前を知らんのだが、「私」という女性が主人公のミステリ)には副主人公として本職の噺家(残念ながら東京落語。別に残念なことはないか)が登場する。かんべむさしの「笑い宇宙の旅芸人」は、「笑い」というものを徹底的に分析した大作だが、これにもたしか噺家が登場したと思う(たしかめたわけではないので信用しないように。調べんかい)中島らもの近作「寝ずの番」(集英社)は、師匠のお通夜の席に集まった弟子たちの会話だけでつづる異色作だが、実在の噺家のいろいろなエピソードを盛り込んで噺家の生活・会話をリアルに描いている(けど、東京落語と上方落語が混在しているような気がする)。落語家の桂三枝は小説も書いている(たしか、「ゴルフ

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第 11 回:落語 と創作

「夜明け前」の小説版があったように思うのだが、たしかめたわけではないので信用しないように。調べんかい。あと、吉本を舞台にした殺人事件の小説も書いていたような気がするが、たしかめたわけではないので、信用しないように。調べんかい)で、何が言いたいかというと、小説家の中で落語に関心を持っている人は数多いということだ。

というわけで、このあたりで創作落語を書いてみることにしよう。全く流れというものを無視した展開にとまどっておられる読者もいるかもしれないが、なぜここで私が「創作落語を書いてみることにしよう」などと言いつつ出ることになったかを鏝々述べていってももちろんよいのだが、読者諸氏には興味のないことであろうから省略する。

さてさて、このへんで紙数が尽きたので、今回は終わりたいと思うが、

創作落語について肝心のことが書いていない。つまり、「落語をいかに書くか」である。ものはためしに、私も落語を一編書いてみようと思う。

今、1999年4月2日午前3時現在、私は何のネタも考えていない。全く空手の状態である。ここから、何もないところから、果たして一編の落語ができあがるかどうか御立ち会い。この連載は、嘘でも「落語とSF」ということになっているので、題材はSFにしよう。次回はSF落語を一挙掲載するので乞うご期待。

あー、最後までまじめに通した。
あー、しんど。ビール飲んで寝よ寝よ。